

青年期女子におけるアサーションと攻撃性 および自己受容との関係

目白大学人間社会学部 心理カウンセリング学科 沢崎 達夫

【要約】

これまでに作成されたいくつかのアサーション尺度はいずれもアサーションが攻撃性と高い相関を示すことを報告している。このことを言語的攻撃性を測定する尺度を用いて再度検討することが本研究の第1の目的である。第2の目的はアサーションが自尊感情や自信と関連するというこれまでの見解を自己受容測定尺度を用いて確認しようとするところである。青年期女子134名を調査対象とし、青年用アサーション尺度、自己受容尺度、日本版BAQの言語的攻撃性尺度の3尺度を実施した。その結果、アサーションと攻撃性の間には.70の高い相関が見られ、アサーションの得点で低、中、高の3群に分けたときも、明確に3群間で有意な差が見られた。このことから、アサーションと攻撃性に共通の要因がかかわっていることが示唆された。また、アサーションと自己受容の間には.40の相関が見られ、各領域との間にも有意な相関が見られたので、アサーティブな人ほど自己受容的であることが示唆されたと言える。

キーワード：アサーション、攻撃性、自己受容、青年期

問題と目的

アサーション (assertion) とは「自分も相手も大切にしたい自己表現」(平木、1993) のことであるが、近年、我が国では対人援助を主たる業務としている心理、教育、看護、福祉等の領域、また産業領域において、このアサーションを学ぼうという気運が高まってきている。こうした背景には、価値観の多様化、国際化等の影響で、これまで以上にさまざまな考え方や感じ方をする人々同士が接触することになったが、一方で少子化、高度情報化等により親密な人間関係を体験する機会が減少し、人間関係に伴う問題を抱える人が増えてきたことがあげられる。これに伴って人々がどのようにコミュニケーションを取ったらよいのか、また人間関係の中で生じた問題をどのように解決していけばいいのかを模索する必要性が増してきていると考えられる。

アサーションを身につけるために行われるアサーション・トレーニングでは、人間の言動を

攻撃的 (aggressive)、非主張的 (non-assertive)、そしてアサーティブ (assertive) の3種類に分類している (平木、1993)。前述したアサーションの説明にならっていえば、攻撃的とは「自分は大切にしたいが、相手を大切にしない自己表現」、非主張的とは「自分は大切にしたいが、相手を大切にしたい自己表現」と説明することができる。このように、この3種類の言動は自尊心という観点からそれぞれ異なるタイプの言動として区別される。そして、こうしたアサーティブなあり方が現在求められているのは先に述べたとおりである。

アサーション・トレーニングは急速に普及してきているが、我が国においてはその実践面が先行して、研究面が遅れていることは否めない。その理由の一つに、適切なアサーション測定尺度がまだ存在していないことがあげられる。児童期では古市 (1993, 1995) や濱口 (1994) 等の尺度が知られているが、青年期以降の研究では、伊藤 (2001) の研究以外は、その測定にお

いて参加者の簡単な感想やトレーナーの印象程度で終わっているのがほとんどである。

こうした中で玉瀬ら (2001) は 16 項目から成る青年用アサーション尺度を作成した。この尺度はアサーションに関する内外の研究を参考にして項目を集め、高い信頼性と妥当性を備えた尺度となっている。この尺度は関係形成因子と説得交渉因子の 2 因子構造をなしているが、Y-G 性格検査の攻撃性因子との相関が 16 項目全体では .44、関係形成因子では .34、説得交渉因子では .38 となり、いずれも有意な正の相関を示している。また、関係形成因子の高低に関わらず、説得交渉因子の高得点群が低得点群よりも攻撃性得点が高いという結果が得られている。

このように質問紙上ではアサーションと攻撃性の関連が示されたという結果は、いくつかの研究で見られる。濱口 (1994) は、予備調査の結果、本明-ギルフォード性格検査 (小学用) の攻撃性尺度と、彼の作成した児童用主張性尺度の「権利の防衛」、「要求の拒絶」、「異なる意見の表明」等の因子との間に有意な正の相関があることを明らかにし、実際にはこうした項目を削除して最終的な尺度を作成したと述べている。

また古市 (1993) は、児童の主張性と Y-G 性格検査の攻撃性尺度について重回帰分析を行った結果、有意な関連を得たことについて、「それぞれの行動のあり方を規定する性格特性というレベルで見ると、攻撃性という点において両者は共通していると言えるかもしれない」と述べている。同じく古市 (1995) では、「抗議表明」が攻撃性 (新性格検査) と高い相関を示したことについて、性格特性としての攻撃性とその基礎の一つになっている可能性があることを示唆している。

これらの結果によれば、アサーションと攻撃性との間には有意な正の相関があることはほぼ一致しており、その相関もアサーションのある部分に限定されていることが予想される。しかし、これらの研究はいずれも既存の性格検査の中の一つの下位尺度である攻撃性尺度を用いており、当初から攻撃性そのものを測定するために作成した質問項目を用いてはいない。また、

攻撃性の内容についても触れていない。そして、これまで用いられているアサーション尺度の多くがスキルとしての言語レベルの項目を用いていることから、攻撃性の内容もそうした言語レベルに対応した尺度を用いて検討する必要がある。

次にアサーションの定義である「自分も相手も大切にしたい」という部分を考えてみたい。この「自分を大切にしたい」という表現に最も近い心理学用語は自尊感情であると考えるのが一般的であろう。平木 (1993) は自信という言葉を用い、これを自己信頼のことであると述べている。さらに平木は、この自信は、自己理解、自己受容、自尊心の 3 つから成り立っていると指摘している。

このようにアサーションを自己に対する意識と関連づける立場は、伊藤 (1998) によれば、ロジャーズに代表される人間中心の立場 (Person-Centered Approach、以下 PCA と略す) である。一方、従来からの行動療法の流れをくむ立場では、社会的スキルの一つとしてアサーションを捉えている。自尊感情を強調する PCA の立場では、従来からあまり実証的な研究が行われていない。先に述べた研究の遅れは、こうした点にも理由があると思われる。

この PCA の立場からアサーションにかかわる考察を行った園田 (2001, 2003) は、トレーニングを行うにつれ、「個人の自己信頼や自尊感情を育てるものであることについて確信を抱くようになる」と述べている。また、Rees & Graham (1991) も「主張的であるということは自尊心を確立することである。」と明確に述べている。しかし、こうしたことについて、実証的に検討した研究はそれほど多くない。

古市 (1995) は自ら作成した主張性検査の 3 下位尺度と劣等感の間に有意な負の相関があったことを示し、自己評価の低さあるいは自信の欠如が主張性の低さにつながることを、そしてこの傾向が女子に高く、主張行動の遂行にはある程度の自己評価の高さや自信が必要だということが示唆されたとしている。先に述べた伊藤 (1998) は新たな尺度としてアサーティブ・マインド・スケールを作成し、その第 1 因子を「自己表現に対する肯定的態度」としている。

これは前述の自尊感情とはやや異なるものだと考えられるが、伊藤（2001）は実際のトレーニングに参加した者の変化を追跡した研究において、「相手に身構えず、自己受容ができて、等身大の自分でいられるようになった」と述べており、トレーニングによって自己受容が可能になることを示している。このような結果から、アサーションが可能になるためには自己に対する肯定的な評価が必要であり、またアサーションが可能になると肯定的な評価も高まることが予想される。

以上を踏まえて、本研究の目的をまとめて整理する。まず、第一は言語的な攻撃性とアサーションとの関連を検討することである。これについては、先行研究の結果から、正の関連が得られることが予想される。第二は、アサーションと関連が深いと思われる自己に対する意識の中から「自己受容」を取り上げ、これとアサーションとの関連を検討することである。それについても、その定義や先行研究から、アサーションと自己受容との間に正の関連があると予想される。なお、先に述べた古市（1995）や沢崎（1993）の研究結果から、男子に比べて女子の自己評価や自己受容が低いことが知られているので、この点を踏まえながら、特に青年期女子を対象としてこの傾向を検討したい。

方法

1. 調査方法と対象

健常な大学生、短期大学生、専門学校生、および社会人の女子青年を対象とした。質問紙は、私立M大学のサークル、クラス、同窓会などから協力者を募り、郵送と手渡しを併用して、調査用紙を配布、回収した。実施時期は2003年の10月から11月の間であった。

最終的な分析に用いた人数は134名で、そのうち学生は87名、社会人は47名であった。調査対象者全体の平均年齢は21.63歳（範囲は18～30歳）、学生の平均年齢は20.43歳（範囲は18～25歳）、社会人の平均年齢は23.87歳（範囲は18～30歳）であった。

2. 質問紙

(1) アサーションの測定

アサーションは、玉瀬ら（2001）が作成した青年用アサーション尺度を使用して測定した。この尺度は「関係形成因子」（人とよい関係を形成することにかかわるもの）8項目と、「説得交渉因子」（何らかの葛藤的な場面において、相手に対して説得や交渉を行うことにかかわるもの）8項目の2因子からアサーション行動を捉えようとするものである。回答は「非常によく当てはまる」を5、「全く当てはまらない」を1とした5件法である。

(2) 自己受容の測定

自己受容は、沢崎（1993）の自己受容測定尺度を用いて測定した。これは、「身体的自己」（主として身体面や外見にかかわるもの）8項目、「精神的自己」（主としてパーソナリティにかかわるもの）15項目、「社会的自己」（主として社会生活にかかわるもの）7項目、役割的自己（自己の役割に関するもの）5項目、全体的自己（自己の全体像にかかわるもの）2項目、の5領域から自己受容を捉えるものである。

回答は5件法である。「それでまったくよい、そのままよい」（積極的受容）を5、「それでまあまあよい、それでかまわない」（消極的受容）を4、「どちらでもない、わからない」を3、「それでは少しいやだ、少し気になる」（消極的拒否）を2、「それではまったくいやだ、気に入らない」（積極的拒否）を1としている。

(3) 攻撃性の測定

攻撃性の測定は、安藤ら（1999）の日本版 Buss-Perry 攻撃性質問紙（以下、日本版 BAQ と略す）の中から「言語的攻撃」（言語的な攻撃反応を測定する下位尺度で、自己主張、議論好きなどを測定しようとするもの）因子5項目を取り上げた。なお、この尺度は他に情緒的側面の「短気」、認知的側面の「敵意」、行動的側面の「身体的攻撃」が含まれる4因子25項目からなる尺度であるが、青年用アサーション尺度が言語面の測定を主としているため、それとの整合性を図るため、「言語的攻撃」のみを取り上げた。回答は「非常によく当てはまる」を5、「全く当てはまらない」を1とした5件法である。

結果

1. 結果の処理

青年用アサーション尺度については回答の選択肢の1～5までをそのまま得点化し、各下位尺度および全項目の得点を求めた。なお、逆転項目については逆に得点化した。合計得点は16点から80点までの間に分布し、二つの下位尺度については8点から40点の間に分布することになる。いずれも高得点であるほど、アサーティブな行動を取っていることを示している。

日本版BAQの「言語的攻撃性尺度」では、同様に回答の選択肢を1～5までそのまま得点化し、全項目の得点を求めた。逆転項目については逆に得点化した。合計得点は5点から25点までの間に分布し、高得点であるほど言語的な攻撃性が高いことを示す。

自己受容測定尺度も回答の選択肢をそのまま得点化し、各領域および全項目の合計得点を求めた。なお、役割的自己のうち「夫または妻としての自分」の回答者は8名、「父親または母親としての自分」は2名といずれも少数であったため、この2項目については今回の分析からは除外した。したがって分析の対象となった項目は35項目であり、合計得点は35点から175点まで分布することになる。なお、領域別では、身体的自己は8点から40点、精神的自己は15点から75点、社会的自己は7点から35点、役割的自己は3点から15点、全体的自己では2点から10点までの間に分布し、いずれも得点が高いほど自己受容的であることを示す。

また、本研究は学生と社会人の両群の被験者を用いているが、アサーション、言語的攻撃、自己受容のいずれも両群に有意差がなかったため、一括して扱うこととする (Table 1)。

Table 1 学生群と社会人群の得点

変数	学生群	社会人群	t値
アサーション	51.79(8.07)	53.72(8.56)	1.29
言語的攻撃	14.49(3.37)	14.96(3.08)	0.78
自己受容	112.53(19.72)	109.45(19.51)	0.87

() 内は標準偏差、自由度はいずれも132

2. 青年用アサーション尺度の分析

青年用アサーション尺度には関係形成と説得交渉の2つの因子があるが、この2つの因子間の関係を分析した。Table 2から明らかなように関係形成因子の方が説得交渉因子よりも有意に得点が高いという結果になった。また、相関係数は.53となり、やや強い正の相関であった。これも1%水準で有意であった。

Table 2 青年用アサーション尺度の2つの因子間の関係

因子	平均 (SD)	両者の相関	t値
関係形成	27.76 (4.57)	.53**	7.71**
説得交渉	24.71 (4.87)		

t検定の自由度は133である。 ** p < .01

3. アサーションと自己受容、攻撃性の関係

Table 3にアサーションと攻撃性および自己受容の各尺度間の相関係数を示した。

アサーション全体とそれを構成する二つの因子間にはかなり強い正の相関が見られた。アサーションと攻撃性の間には.70とかなり高く、有意な正の相関があった。また、アサーションと自己受容全体との間には.40の有意な正の相関、また自己受容の各尺度との間にも有意な正の相関が見られた。ただ、社会的自己との相関係数は他の尺度と比べるとやや低かった。

関係形成因子は攻撃性と.60の正のやや強い相関が見られた。自己受容の各尺度ともそれぞれ正の相関が見られた。説得交渉因子にも攻撃性との間に、.62という正のやや強い相関が見られた。また、社会的自己の尺度とは有意な相関が見られなかった。

攻撃性も社会的自己との間に有意な相関が見られなかったが、その他の自己受容の各尺度とは正の有意な相関が得られた。自己受容全体とも.31の有意な正の相関が見られた。

Table 3 アサーションと攻撃性および自己受容の各尺度間の相関係数

	アサーション	関係形成	説得交渉	攻撃性	身体的	精神的	社会的	役割的	全体的	自己受容
アサーション		.87**	.88**	.70**	.32**	.37**	.22*	.36**	.35**	.40**
関係形成			.53**	.60**	.33**	.38**	.27**	.28**	.33**	.41**
説得交渉				.62**	.23**	.26**	.12**	.35**	.27**	.29**
攻撃性					.30**	.33**	.07	.25**	.18*	.31**
身体的						.63**	.48**	.48**	.48**	.80**
精神的							.49**	.58**	.55**	.90**
社会的								.55**	.49**	.74**
役割的									.56**	.73**
全体的										.69**
自己受容										

* p < .05 ** p < .01

4. アサーション尺度の高低による他の変数の比較

青年用アサーション尺度の合計得点の高低によって、自己受容や攻撃性の各尺度がどのように変化するかを検討した。まず全員のアサーション得点の度数分布を求め、各群の人数がなるべく均等になるように、低アサーション群（以下、低A群と略す）、中アサーション群（以下、中A群と略す）、高アサーション群（以下、高A群と略す）の3群に分類した。その結果、29点～48点までが低A群（43名）、49点～56点までが中A群（47名）、57点～72点までが高A群（44名）となった。それぞれの群のアサーション平均得点は低A群が43.21点（SD = 4.50）、中A群が52.57点（SD = 2.51）、高A群が61.41点（SD = 4.14）であった。

この3群間で、自己受容の合計得点および各尺度の得点と攻撃性得点について、差があるかどうかを一要因の分散分析を用いて検討した。有意差のあった要因についてはさらにLSD法を用いて多重比較を行った。その結果がTable 4である。

自己受容、攻撃性の全ての変数に関して低A群、中A群、高A群の順に得点が高くなる傾向が見られ、いずれの群間にも有意な差が見られた。さらに、多重比較によって、いずれの変数においても、低A群は高A群よりも得点が高いことが確認された。このことにより、低A群は高A群に比べて自己受容の程度が低いこと、ま

た低A群は高A群よりも攻撃性が低いことが確認された。特に攻撃性においては低、中、高の各A群の間全てに有意な差が見られ、アサーションと攻撃性の関連が明確になった。

Table 4 アサーション得点の高低による自己受容と攻撃性の比較

変数・群	平均	SD	F 値	多重比較
身体的自己				
低 A 群	22.91	5.01	3.40*	低<高
中 A 群	24.70	4.48		
高 A 群	25.75	5.87		
精神的自己				
低 A 群	43.72	9.08	6.67**	低<高
中 A 群	47.70	7.56		
高 A 群	50.91	10.76		
社会的自己				
低 A 群	22.86	4.85	3.87*	低<高
中 A 群	23.36	4.72		
高 A 群	25.48	4.48		
役割的自己				
低 A 群	8.49	2.45	8.20**	低<高
中 A 群	9.81	2.09		
高 A 群	10.57	2.71		
全体的自己				
低 A 群	5.16	1.96	5.66**	低<中
中 A 群	6.26	1.86		
高 A 群	6.45	1.97		
自己受容合計				
低 A 群	103.14	19.49	8.02**	低<中
中 A 群	111.83	16.25		
高 A 群	119.16	20.21		
攻撃性				
低 A 群	12.23	2.76	35.48**	低<中
中 A 群	14.66	2.27		
高 A 群	17.02	2.91		

* p < .05 ** p < .01

5. 関係形成因子の高低による他の変数の比較

関係形成因子の合計得点の高低によって、自己受容や攻撃性の各尺度がどのように変化するかを検討した。まず全員の関係形成得点の度数分布を求め、各群の人数がなるべく均等になるように、低関係形成群（以下、低 R 群と略す）、中関係形成群（以下、中 R 群と略す）、高関係形成群（以下、高 R 群と略す）の 3 群に分類した。その結果、16 点～25 点までが低 R 群（47 名）、26 点～30 点までが中 R 群（47 名）、31 点～39 点までが高 R 群（40 名）となった。そ

れぞれの群の関係形成得点の平均は低 R 群が 22.91 点（SD = 2.31）、中 R 群が 28.06 点（SD = 1.33）、高 R 群が 33.10 点（SD = 2.31）であった。

この 3 群間で、自己受容の合計得点および各領域の得点と攻撃性得点について、差があるかどうかを一要因の分散分析を用いて検討した。有意差のあった要因についてはさらに LSD 法を用いて多重比較を行った。その結果が Table 5 である。

自己受容、攻撃性の全ての変数に関して低 R

群、中 R 群、高 R 群の順に得点が高くなる傾向が見られたが、社会的自己と役割的自己の両受容尺度においては、群間に有意な差が見られなかった。それ以外の自己受容の各尺度と攻撃性には群間で有意な差が見られたので、さらに、多重比較を行った。その結果、いずれの変数においても、低 R 群は高 R 群よりも得点が低いこ

とが確認された。このことにより、低 R 群は高 R 群に比べて自己受容の程度が低いこと、また低 R 群は高 R 群よりも攻撃性が低いことが確認された。特に攻撃性においては低、中、高の各 R 群の間全てに有意な差が見られ、関係形成因子と攻撃性の関連が明確になった。

Table 5 関係形成得点の高低による自己受容と攻撃性の比較

変数・群	平均	SD	F 値	多重比較
身体的自己				
低 R 群	22.77	5.23	6.28**	低<高 中<高
中 R 群	24.36	4.31		
高 R 群	26.60	5.51		
精神的自己				
低 R 群	44.43	9.20	7.05**	低<高 中<高
中 R 群	46.90	8.34		
高 R 群	51.75	10.02		
社会的自己				
低 R 群	22.68	5.23	2.81	
中 R 群	24.13	4.27		
高 R 群	25.05	4.60		
役割的自己				
低 R 群	9.17	3.03	1.54	
中 R 群	9.68	2.13		
高 R 群	10.13	2.35		
全体的自己				
低 R 群	5.28	2.05	5.17**	低<高 中<高
中 R 群	6.15	1.87		
高 R 群	6.58	1.88		
自己受容合計				
低 R 群	104.32	20.56	7.69**	低<高 中<高
中 R 群	111.21	16.12		
高 R 群	120.10	19.25		
攻撃性				
低 R 群	12.81	2.98	29.55**	低<中 低<高 中<高
中 R 群	14.28	2.36		
高 R 群	17.27	2.85		

** p < .01

6. 説得交渉因子の高低による他の変数の比較

説得交渉因子の合計得点の高低によって、自己受容や攻撃性の各尺度がどのように変化するかを検討した。まず全員の説得交渉得点の度数分布を求め、各群の人数がなるべく均等になるように、低説得交渉群（以下、低P群と略す）、中説得交渉群（以下、中P群と略す）、高説得交渉群（以下、高P群と略す）の3群に分類した。その結果、13点～22点までが低P群（41名）、23点～26点までが中P群（46名）、27点～38点までが高P群（47名）となった。そ

れぞれの群の説得交渉得点の平均は低P群が19.05点（SD = 2.85）、中P群が24.65点（SD = 1.20）、高P群が29.70点（SD = 2.50）であった。

この3群間で、自己受容の合計得点および各領域の得点と攻撃性得点について、差があるかどうかを一要因の分散分析を用いて検討した。有意差のあった要因についてはさらにLSD法を用いて多重比較を行った。その結果がTable 6である。

自己受容、攻撃性の全ての変数に関して低P

Table 6 説得交渉得点の高低による自己受容と攻撃性の比較

変数・群	平均	SD	F値	多重比較
身体的自己				
低P群	23.20	4.90	2.05	
中P群	24.63	4.60		
高P群	25.43	5.93		
精神的自己				
低P群	44.32	8.70	5.42**	低<高 中<高
中P群	46.93	9.07		
高P群	50.77	9.92		
社会的自己				
低P群	23.39	4.96	1.04	
中P群	23.52	4.43		
高P群	24.70	4.95		
役割的自己				
低P群	8.61	2.40	7.49**	低<高 中<高
中P群	9.54	1.80		
高P群	10.62	2.95		
全体的自己				
低P群	5.34	2.06	4.82*	低<高
中P群	5.87	1.73		
高P群	6.62	2.03		
自己受容合計				
低P群	104.85	19.15	5.43**	低<高
中P群	110.50	16.92		
高P群	118.13	20.48		
攻撃性				
低P群	12.54	2.97	25.38**	低<中 低<高 中<高
中P群	14.39	2.57		
高P群	16.77	2.84		

* p < .05 * p < .01

群、中P群、高P群の順に得点が高くなる傾向が見られたが、身体的自己と社会的自己の両受容尺度においては、群間に有意な差が見られなかった。それ以外の自己受容の各尺度と攻撃性には群間で有意な差が見られたので、さらに、多重比較を行った。その結果、いずれの変数においても、低P群は高P群よりも得点が低いことが確認された。このことにより、低P群は高P群に比べて自己受容の程度が低いこと、また低P群は高P群よりも攻撃性が低いことが確認された。特に攻撃性においては低、中、高の各P群の間全てに有意な差が見られ、説得交渉因子と攻撃性の関連が明確になった。

考察

青年用アサーション尺度には関係形成因子と説得交渉因子の2因子があるが、この両者は平木(1993)のいう「日常会話」と「課題解決」のそれぞれのアサーションに対応するとも言える。今回の研究からは関係形成因子の方が得点が高く、こうした言動の方がより身につけている、すなわち容易であるとの結果が得られた。説得交渉の方が自ら積極的に相手に働きかける必要性があり、より困難であると考えられることができるし、また相手との葛藤が起こる可能性を予期して躊躇しやすいということもできるであろう。

この両者の関係について、玉瀬(2001)は横並びと考えるべきか、縦並びもしくは段階的なものと考えられるべきか、実証を深めつつ議論すべきであろうと述べているが、一方では一般論として関係形成が十分できるようになった後に説得交渉ができる能力が習得されるのではないかと述べている。今回の結果からも、両者の相関が.53であり、この両者は独立というよりは、関係形成ができるほど説得交渉もしやすくなるという関連性を持っていることが予想される。

次にアサーションと自己受容、攻撃性のそれぞれの関係について考えてみたい。Table 3でまず注目されるのはアサーションと攻撃性の相関の高さである。また、攻撃性はアサーション尺度の二つの因子、関係形成と説得交渉ともかなり相関が高い。本来、アサーションと攻撃性

とは概念的に区別されるべきものであるが(平木, 1993)、この両者の関連を指摘する研究は多い。たとえば、玉瀬(2001)ではY-G性格検査の攻撃性とアサーション尺度の相関の高さを指摘しているし、田中(2003)は「怒り外向性の高いものは自己の主張性を高く評価する」と述べ、両者の関係を示唆している。

このような関係が生じている原因には次のようなことが考えられる。ひとつは共に自分の考えや気持ちを表現しようとする積極性あるいは動機づけが必要であるということである。すなわち、背景にある内面的な要因にはかなり共通したものがあると考えられる。

もう一つは質問紙という方法論に伴う問題である。たとえば、説得交渉因子の項目に「買った商品に欠陥があったら交換してもらおう」というものがあるが、これを質問紙で回答する場合に「交換して欲しい」ということを「アサーティブ」に(冷静に丁寧に)表現するのか、「攻撃的」に(強引に一方的に)表現するのかが、被験者には区別されないまま回答する可能性が高いということがある。

玉瀬(2001)は両者の共通性を強調しながら、ある程度の相関があることを是認すること、アサーションの項目作成にあたっては、攻撃性を除外するという発想をとる必要はないのではないかという見解を示している。しかし、この両者は概念的には異なるものであるので、可能な限り区別する必要があるのではないかと考えられる。すなわち、内面的な共通性(積極性、行動への動機づけ)は認めるものの、表現レベルでは区別をするという試みについては今後の課題として考えていく必要がある。この場合にアサーションの特徴である「他者尊重」の概念をどう組み込むかということが一つの視点となるであろう。また、非言語的な要因をどう加えるかという観点についても今後検討する必要がある。

次に、アサーションと自己受容については.40というやや強い相関であった。これは「自分を大切にする」というアサーションの定義を支持するものである。関係形成因子もほぼ同様の.41という相関係数であったが、説得交渉では.29というやや低い相関であった。自分を受けて入

れているということは、自分の考えや気持ちをしっかりと認識でき、さらにそれを自分のものとして大切に思い、またそれを表現しようという意欲を高めることを示していると考えられる。先に述べたように、これまでアサーションと自己受容あるいは自尊感情などとの関連に関する実証的な研究がほとんどなかった。本研究によって自己受容との関連が明らかになったと言える。

なお、自己受容は攻撃性とも.31というそれほど高くはないが、有意な相関を示した。自己受容は本来他者受容と密接な関連を持ち(沢崎、1984)、その意味では攻撃性とは相反するものであるというのがこれまでの考え方であった。しかし、本研究の結果はこれとは異なるように思われる。これはどのように解釈できるであろうか。

一つは平木(1993)の定義から、攻撃的な自己表現には「自分のことをまず考える」という意味が含まれてくるので、そうした意味での自分のことを大切にしようという気持ちが表れたと考えることが可能であろう。また、攻撃性には自分を守るという側面もあることから「自分を大切にする」という点が表れたと考えることもできよう。さらに、攻撃性は確かに表現レベルでは他者否定的な言動になるが、前述したように行動を起こそうとする積極性や動機づけが背景にあり、これが自己受容の高い人に見られる特性と共通すると考えることもできる。しかし、こうした点についてはなお、検討の余地が残されている。

また、Table 3でもう一つ注目されるのは社会的自己の受容と攻撃性、説得交渉の2因子との間に相関が見られなかったことである。社会的自己とは自己の社会的側面(職業、経済状態、住居など)が中心的な内容であり、攻撃性とは独立した要因であったと考えてよいだろう。

アサーション合計と関係形成、説得交渉のそれぞれの得点によって、被験者を高、中、低の3群に分けて、自己受容および攻撃性との関連を検討した結果、いくつかの共通した結果が得られた。まず3種のアサーション得点の低群は高群に比べて、概ね自己受容や攻撃性が低いという傾向が見られた。これは先に述べた相関係

数を用いた分析と基本的には同じ結果である。有意差が見られなかったのは、関係形成群における社会的自己と役割的自己の受容、説得交渉群における身体的自己および社会的自己の受容であった。

関係形成において差が見られなかった両自己はいずれも個人の内面というよりも社会的な側面を示したものであり、また説得交渉においてもこの社会的自己に有意差が見られなかったことから、アサーションは個人の社会的な側面に対する評価とはあまり関連が強くないということになるであろう。

役割的自己が説得交渉において有意な差が見られたことは、説得交渉的なアサーションが高いものほど人間関係の中での自分の役割を受容していることを意味する。役割の中での自信や安定感が説得交渉をしやすくしているのかもしれない。また、身体的自己が説得交渉で有意差が出なかったのも、自己の外に向けた側面であるという影響が現れたのかもしれない。

こうした中で一貫してアサーションとの間に有意差が見られたのが精神的自己と全体的自己であった。精神的自己は主にパーソナリティであり、全体的自己は現在の自分や過去の自分である。こうした自己の内面や自己の全体の受容がアサーションに強く関連しているということが言えるであろう。アサーションでいう「自分を大切にする」ということはここで言うところの自分の精神的自己や自己の全体であり、まさに自分の気持ちや考えを尊重することと密接につながると言えよう。

攻撃性とアサーションの3得点との関連ではいずれも低、中、高の3群間のそれぞれに有意な差があり、明確にアサーション得点が高ければ攻撃性も高い、アサーション得点が低ければ攻撃性も低いという傾向が現れた。これは先の相関分析と同様の結果であるが、アサーションと攻撃性の関連については今後もさらに検討していく必要があるだろう。

なお、ここで言う攻撃性は言語的攻撃性であり、攻撃的言動を他者に向かって行うことを指しているが、今後は柴橋(1998, 2001)の言うように受動的な攻撃(passive aggressive)を含んださらに広範な攻撃性を取り入れた検討が

必要であろう。

注

本研究のデータ収集に当たっては、菅野由実子さんの力に負うところが大きい。ここに記して感謝する。

引用文献

安藤明人・曾我祥子・山崎勝之・島井哲志・嶋田洋徳・宇津木成介・大芦治・坂井明子

1999 日本版 Buss-Perry 攻撃性質問紙 (BAQ) の作成と妥当性、信頼性の検討 心理学研究, 70, 384-392.

古市裕一 1993 主張性検査開発の試み ころの健康, 8 (2), 87-93.

古市裕一 1995 児童用主張性検査の開発 ころの健康, 10 (2), 69-76.

濱口佳和 1994 児童用主張性尺度の構成 教育心理学研究, 42, 463-470.

平木典子 1993 アサーション・トレーニングーさわやかな〈自己表現〉のためにー 金子書房 (日本・精神技術研究所発行)

伊藤弥生 1998 アサーティブ・マインド・スケール (Assertive Mind Scale) 作成の試み 人間性心理学研究, 16, 212-219.

伊藤弥生 2001 日本におけるアサーション像の探索的研究ーアサーション・トレーニング参加者の個別面接を土台にー 心理臨床学研究, 19, 410-420.

Rees, S.& Graham, R.S. 1991 ASSERTION TRAINING : How to be who you are. Routledge, London (高山巖・吉牟田直孝・吉牟田直訳 1996 自己主張トレーニングーありのままに生きるためにー 岩崎学術出版)

沢崎達夫 1984 自己受容に関する文献的研究 (1)ーその概念と測定法についてー 教育相談研究, 第22集, 43-60.

沢崎達夫 1993 自己受容に関する研究 (1)ー新しい自己受容測定尺度の青年期における信頼性と妥当性の検討ー カウンセリング研究, 26, 29-37.

柴橋祐子 1998 思春期の友人関係におけるア

サーション能力育成の意義と主張性尺度研究の課題について カウンセリング研究, 31, 19-26.

柴橋祐子 2001 青年期の友人関係における自己表明と他者の表明を望む気持ち 発達心理学研究, 12, 123-134.

園田雅代 2001 ヒューマンサービス従事者のためのアサーション・トレーニング;フォーカシングの導入をめぐる 創価大学教育学部論集, 第51号, 29-47.

園田雅代 2003 クライアント中心療法から見るアサーション教育の効果;参加者の〈語り〉を手がかりに 創価大学教育学部論集, 第53号, 17-38.

玉瀬耕治・越智敏洋・才能千景・石川昌代 2001 青年用アサーション尺度の作成と信頼性および妥当性の検討 奈良教育大学紀要, 第50巻1号 (人文・社会), 221-232.

田中輝美 2003 高怒り内向者と高怒り外向者の主張性評価における特徴 カウンセリング研究, 36, 149-155.

The Relations between Assertion, Aggression and Self-acceptance in Adolescent Females

Tatsuo Sawazaki Department of Psychological Counseling, School of Human and
Social Science, Mejiro University

Mejiro journal of Psychology.2006 vol.2

Abstract

Recent studies about assertion and aggression reported high coefficient of correlation of between these variables. A purpose of this study is to clarify the relation between assertion and verbal aggression. The another aim is to show the tendency that the more assertive the persons are, the more acceptable of themselves they are. One hundred and thirty-four adolescent females answered three questionnaires, that is, Assertion-Scale for adolescents, Self-Acceptance Scale and Buss-Perry Aggression Questionnaire. The results are that coefficient of correlation between assertion and aggression is .70 and high assertive group members are more aggressive than lower ones. Assertive and aggression are seemed to be based on common psychological factors. The results that correlation between assertion and self-acceptance are also high scores revealed that assertive persons are self-acceptable ones.

Key words : Assertion, Aggression, Self-acceptance, Adolescence